

令和元年6月19日現在

機関番号：32708

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K01536

研究課題名(和文)人間の運動感覚(動感)の現象学的・動態論的研究

研究課題名(英文)Research of our dynamic sense of movement from a phenomenological viewpoint

研究代表者

柿沼 美穂(Kakinuma, Miho)

東京工芸大学・芸術学部・講師

研究者番号：10401481

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：人間の動き(movement)に関する身体知を言語化・データ化し、他者へと伝達することは容易ではないが、われわれは、体育をはじめとする学校の授業や高度な職人技の伝承を必要とする職業など、生活のさまざまな場面でその必要性に迫られている。この研究においては、生田久美子による「わざ言語」とルドルフ・ラバンの「エフォート」という、movementの質的側面すなわち運動感覚に関する2つの代表的な記述方法を取り上げ、コンテンポラリーダンスの指導実験を通じて、それらがどのようにmovementの質的側面を喚起しているかを考察した。この研究によって記述方法のより効果的な使用方法への展望が開かれた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

人間の身体の動き(movement)の質的側面は、記述や伝達が最も困難なところであるが、われわれは言語の適切な使用によって、それを表現・伝達することが可能である。この研究における実験により、言語が身体のmovementと密接な(おそらくは非常に直接的な)関係を有している可能性が示された。これは、言語の適切な使用が人間の「わざ」を伝承する場合に有効であること示すとともに、概念あるいは精神的なものとされる言語の異なる側面(=身体的側面)にあらためて光を当てることが可能となった。

研究成果の概要(英文)：It is not easy to put our physical knowledge about human movement into words or convert it into data and communicate to others with it. However we are faced with the necessity to do in various scenes of life, for example, in the classes of physical education at school, or in some occupations requiring the high level skills inherited from their predecessors. In this research, I will take up two representative ways of describing our dynamic sense of movement, namely the quality of our movements: "The Languages of Craft (Waza-Gengo)" proposed by Kumiko Ikuta, and Rudolf Laban's "effort." And through our learning experiment of contemporary dance, I discuss how they make influence on our body movements, especially on its qualitative aspects. Thus the research leads the more effective communications of our physical knowledge with words.

研究分野：哲学

キーワード：身体性哲学 身体教育学 現象学 運動感覚 身体知 動きの質 わざ言語 エフォート

1. 研究開始当初の背景

人間の movement (01) を、その運動感覚 (= 動感) を含めて記録・伝達することは容易ではない。理由は、複雑な構造の身体をもつ人間の movement 自体が複雑であるということに加え、その質的側面にかかわる人間の動感がきわめて主観的なものであり、またわれわれがそれを詳細に記述する適切な方法をもたないため、正確な記録が困難だからである。現在のように動画の技術が進んで、三次元の映像の撮影も可能となり、movement における形の変化を相当程度正確に記録できるようになっても、そこに息づく人間の主観的な動感まで捉えることはできない。そしてまた、このように主観的な動感を必要十分に記述するための「ことば」を、われわれは有していないのである。

しかしながら、動感のような身体の感覚を積極的に示唆し、喚起可能なことばはもちろん存在する。その代表的かつ対照的な 2 例が、生田久美子の提唱する「わざ言語」(The Languages of Craft) (02) とラバン (Rudolf von Laban, 1879-1958) の「エフォート」(03) (effort) である。報告者は、これらの「ことば」(あるいは言語的表現)が、身体の movement、特に、言語化が困難でありながら、その movement の獲得に欠くべからざる(いわば「原事態」(04)としての)動感の獲得とどのような関係をもっているかについて、コンテンポラリーダンスの練習指導を通じて明らかにする比較実験を計画・実施し、その結果について考察を行った。わざ言語とエフォートという 2 つのことばが動感の示唆・喚起にきわめて対照的なしかたでアプローチすることは事前の研究によって理解されていたが、今回実施したような実験および考察は、少なくとも報告者が知る限り行われていない。また、本研究では、この比較実験の結果について、メルロ=ポンティ (Maurice Merleau-Ponty, 1908-1961) の言語論を参照しつつ考察し、言語と身体の特異な関係性について考察することにした。

2. 研究の目的

1. で述べたように、たしかに人間は、われわれ自身の movement、特にその運動感覚、すなわち動感を必要十分なかたちで記録・伝達するための適切な「ことば」をもっていないが、こうした感覚を示唆、あるいは、喚起可能なことばはもちろん存在する。その代表的かつ対照的な 2 例が、生田久美子の提唱する「わざ言語」とラバンの「エフォート」である。この研究においては、これら 2 つのことばが、身体の movement、特にその動感の獲得とどのような関係をもっているかについて、コンテンポラリーダンスの練習指導実験を通じて明らかにすることを目的とした。また実験においては、これら 2 つのことばとの比較のために、movement における身体の形の変化を手続き的に記述することばを単独で使用する場合も組み入れることにした。というのは、movement における身体の形の変化を手続き的に記述することばは、コンテンポラリーダンスをはじめとする movement の練習指導において必須のものであると同時に動感の示唆あるいは喚起に積極的にかかわるものではないからである。

3. 研究の方法

実験は、コンテンポラリーダンスの短いフレーズを振り移す指導実践を、3 種類の異なることばを用いることによって行った。3 種類のことばとは、「最も基本的な movement の形の変化を記述的に説明することば」、「わざ言語」、そしてラバンの「エフォート」に基づくことばである。第一のことばは動感の示唆、喚起に積極的にかかわらない。あとの 2 つは動感の示唆、喚起にきわめて対照的なしかたでアプローチする。指導は先生役 1 名と生徒役 1 名で行い、先生役も実際に動きながら生徒役にことばで説明する。その後、生徒役にインタビューを行い、3 つの指導方法での理解のしかたや動き方、感じ取り方の違いなどを聞き、分析・考察した。

(1) 教材として使われるコンテンポラリーダンスのフレーズ

教材として使われたコンテンポラリーダンスのフレーズは、8×4 呼間。先生役の指導者が予め制作しておいたもので、音楽の伴奏等はない。先生役はこれを生徒役に振り移すべく指導する。

(2) 指導実践の実験詳細

この実験におけるコンテンポラリーダンスの指導は、指導者役のデモンストレーションとともに、3 種類のことば、すなわち「最も基本的と考えられる、movement の形の変化を記述的に説明することば」、「わざ言語」そしてラバンの「エフォート」に基づくことばを用いて行われた。順序は、最も基本的と考えられる、movement の形の変化を記述的に説明することばを用いた指導、わざ言語を用いた指導、エフォートに基づく指導、の順である。指導の時間は全体で約 60 分(前後の準備や説明時間等を除く)である。

(3) 生徒役へのインタビュー

指導練習終了後、3 つの指導方法に関する半構造的なインタビューを生徒役に行った。最初に生徒役の舞踊経歴を確認させていただいたうえで、指導方法の違いによる理解や動き方、感覚の違いに焦点をあてながら指導に関する感想を聞くようにした。全般的な理解しやすさのほかに、movement の種類や、どのようなダンスを目指しての指導であるのかなど、こうした振り移しが孕むさまざまなケースを想定しながら、できるだけ詳細に話を聞いた。特に 3 つの指導方法にかかわる動感のちがいについては、可能なかぎり掘り下げて聞くようにした。インタビューの時間は生徒役一人あたり約 60 分。

4. 研究成果

(1) 3つのことばによる指導と movement 獲得における有効性について

3つのことばの特徴と、生徒役の参加者によるコメントの主な内容、有効と思われる場合については、表1にまとめた。

表1 3つのことばの特徴、生徒役のコメントの主な内容、有効と思われる場合のまとめ

| ことばの種類 | 特徴 | 生徒役のコメントの主な内容 | 有効と思われる場合 |
|----------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| movement の形の変化を記述的に説明することば | <ul style="list-style-type: none"> ・ movement における形の変化を記述。 ・ 客観的な記述が中心。 ・ 動感の喚起にはあまりかわらない。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ movement の形を捉えるために指導においては必須。 ・ デモンストレーションだけで形を捉えるのは容易ではない。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ movement における身体の変化を伝えるときには有効。 ・ 動感の示唆には、わざ言語やエフォートなどと組み合わせるべき。 |
| わざ言語 | <ul style="list-style-type: none"> ・ movement の形・動感の両面にかかわる。 ・ 常識的・論理的な思考方法に捉われない。 ・ 比喩やメタファーを多用する。 ・ 通常使われることばを用いるのでわかりやすい。 ・ 動感の喚起にかなり有効。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ いちばんわかりやすく、入っていきける。 ・ このことばを用いた説明が一番 movement を捉えやすかった。 ・ 説明によって自分が抱いたイメージが、指導者の目指すものと一致しているかどうかはわからない。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ movement の意味や感覚的なものからアプローチするときに有効。 ・ どのように動くべきかという理由や根拠を示す必要があるとき。 ・ 類似の経験をもつ人などでは非常に有用と思われる。 |
| エフォート | <ul style="list-style-type: none"> ・ movement の質に関するシステム化された記述理論。 ・ 事前の学習や使用の経験が必要。 ・ 文化的・歴史的背景に関係なく、使うことが可能。 ・ movement の質をかなり詳細に記述・伝達できる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 出来合いのイメージをいったん解体して要素的な何かを導入するような感じ。 ・ 数学的な感じがする。 ・ movement の質の詳細な分析が必要な場合には有用だと思う。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ movement の細かなところをそろえなければならぬとき。たとえば、音楽と合わせたり、何人かで動きをそろえたりする必要があるとき。 ・ 文化的・歴史的背景が異なる場合など。 |

また、図1は、3つのことばがもつ特徴を、動感を喚起する強さと、喚起のしかたの違いに示したものである。

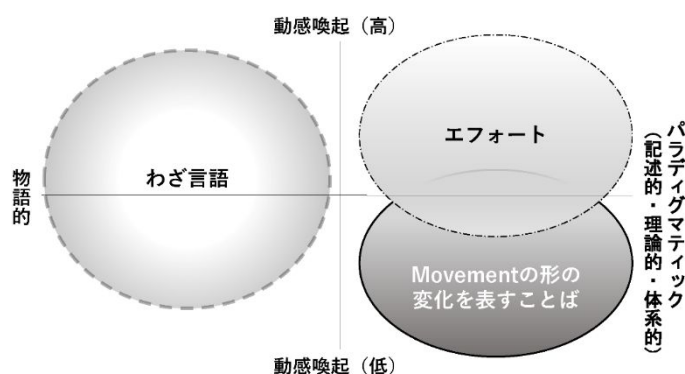


図1 3つのことばの動感喚起の強さとそのしかたの違い

(2) 身体の movement を構造化することばに関する考察

今回の実験に参加していただいた7名の生徒役は、インタビューからも明らかのように、3つの指導方法の違いにきわめて敏感に反応し、異なる印象を受けている。参加者のだれもが、使われることばの種類により、movement の把握のしかたや動きやすさ等がまったく違ってきたと証言しており、また、指導者役のデモンストレーションがあれば不要（あるいは「それほど有用ではない」と報告者が予測していた「最も基本的と考えられる、movement の形の変化を記述的に説明することば」による説明を含めた3種類のことばがすべて movement 獲得に必要であると述べている。つまり、7人の参加者のインタビューは、ことばと身体の movement との強い関係性を、当初の予測を超えて示唆することになったと考えられるのである。

このような事態は、ことばを概念、あるいは精神的所産の一種と捉える考え方からはうまく説明できない。多くの場合、ことばは、概念や対象、あるいは語詞映像などを指示する記号のようなものとして捉えられ、われわれは、その総和が何らかの意味を生み出すと考えている。この考え方に従うと、movementの獲得において、われわれはまず、そのことばが指し示す movementの語詞映像を理解し、それに従って身体を動かすという過程が思い浮かぶ。しかし、今回の実験からは、ことばの違いによって生じた生徒役の参加者たちの感覚の変化が非常にすばやく、また直接的であり、そのような考え方では説明がつかないと感じられた。

報告者は、今回の事例の比較検討が、メルロ＝ポンティによる言語と身体の関係、特に parole が身体の所作にどのように影響を及ぼすかということに対する具体的な例示となるのではと考えている。メルロ＝ポンティは、言活動としての parole を、単なる概念を示唆する記号ではなく、われわれが出会う、ある状況においてふさわしい一定の仕方での身体の movement、すなわち、ふるまいかたを獲得することだと捉えた(05)。さらに彼は、われわれがそのようなことばを理解するのは、恣意的な操作によるものではなく、われわれ自身の身体が、そのことばを引き受け、あらためて所作を行うことによると述べている(06)。つまり、ことばが、動感をはじめとするわれわれの運動能力を喚起・発動、あるいはその上達を促し、われわれの運動感覚に影響を与えるという可能性を示しているのである。しかしながら、彼は、ことばがわれわれの所作すなわち movement を、どのように惹起するかという具体的な考察を明示していない。ことばにはさまざまな種類があり、またその組み合わせによって、多種多様な意味を担うことができる。ことば(あるいはその組み合わせ方)によって、身体の movement を喚起するしかたは一通りではないはずである。今回の事例の比較検討から見いだされたのは、与えられたことばの特徴に応じ、身体がそれに適したしかたで movement を生み出すことであったと考えられるのである。

参加者たちのインタビューが示すように、「movementの形の変化を記述的に説明することば」が用いられたときには、ことばの抽象化・中立化作用を利用して、形の変化を効率的に身体に取り込み、わざわざ言語が使用されると、自身の経験や想像力を用いて、意味の「裂け目」を埋めるように、movementの動感を再創造する。そして、エフォートが使われたときには、本来は意識化しにくい動感に意識を向け、さらにその意識を精密化させながら、movementの質を高めていこうと努める—われわれの身体は、与えられることばが、どのような特徴をもっているかを瞬時に感じ取り、それに適うやり方で、movementの獲得に邁進するのである。

メルロ＝ポンティは、ことばについて、一般的に考えられるような、何らかの概念や対象、語詞映像といったものに直接的に結び付けられるような存在ではないと考えていた。それは、数式の $A=B$ のような、直接的な意味作用をもたず、「いくつもの行動の交錯のなかに見いだされ、たといいったん獲得されても、所作の意味とおなじように正確ではあってもほとんど規定し得ないもの」だと考えたのである(07)。つまり、自分自身の身体に蓄積された経験や世界との関係のなかで、比較や対照といった作業を通じて、ある意味の範囲や方向性を遠隔的に示唆し、そのなかで自分自身がどのように構え、動くかを思い起こさせるような何ものかであり、また、その都度示唆されるところが変化する、そのような性質をもっているものである。

しかし、直接的な意味作用をもっていないにもかかわらず、ことばは、われわれの身体感覚、そして movement に直接的に働きかけ、意味への志向性を浮かび上がらせようとする力をもっている(08)。言い換えれば、普段はその大部分が無意識の下に沈んでいる身体の運動感覚や形態的なところをも含めた movement のさまざまな部分を、引き寄せ、構造化して、movementの獲得へと向かうような働きをする力である。この引き寄せと構造化には、さまざまなしかたがあり、身体はそれに適したしかたで意味を生み出す、つまり movement を獲得しようとするのが、今回の実験の検討から理解されたと報告者は考えている。

この働きは、個々の身体がもつ経験や知識による弁別的な働きを通じて行われるがゆえに、必ずしも一定不変ではなく、人によって異なる。さらに、その人の年齢や身体の状況、あるいは、そのことばがどのようなニュアンスとともに発せられたか、などによっても絶えず変化する可能性を有している(09)。いずれにせよ、これらのことばはすべて、身体の movement を喚起する際、きわめて直接的かつ強い影響力を発揮する。つまり、こうしたことばは、精神による思考を飛び越えて、直接身体へと作用する。そして、通常は、曖昧模糊としているわれわれの身体知を再び意識の下に引き出す働きをするのである。

このようなことは、こうしたことばが実は直接的でない意味作用を担っているために可能となる。動感をはじめとする身体感覚や movement の諸要素は、ことばを契機として、その都度、それぞれの身体に呼応するようなかたちで喚起され、構造化されるからである。言い換えれば、ことばは見えない光源のようなものであり、その都度、ある方向に光を投げかけて意味を照らし出し、イメージのように浮かび上がらせる。そしておそらくそれゆえに、ことばによって生じられる意味、すなわち movement は、ある程度の同一性を保ちながらも絶えず変化し続けるのである。

(3) まとめ—人間の movement の特徴の可能的制約としてのことば

今回の実験では、次のようなことを明らかにできたのではないかと報告者は考えている。一つは、ことばのなかには、movementの獲得に必須となる動感の把握に重要な役割を果たすものがあるということである。今回取り上げたわざわざ言語とエフォートは、たしかにそのような効果を有していた。また、ことばの特徴によって、動感にアプローチするしかたが異なるため、指導の際にはできるだけさまざまなことばを用いるほうが望ましいということである。経験や想像力が重要であ

るわざ言語の場合ならば、ある程度共通了解の基盤がある場合に適しているであろうし、エフォートの場合は、そのような基盤がないとき、あるいは、movementの詳細を考慮したいときなどにふさわしいと考えられる。

そしてもう一つは、ことばが動感をはじめとする身体の movement に働きかける可能の制約としての、ことばと身体の movement との密接なつながりである。通常、ことばは思惟の対象となるものであって、概念や対象、語詞映像などを指示する記号のようなものと理解され、その総和が何らかの意味を生み出すと考えられているため、身体との直接的な関係性についての考察はそれほど多くない。しかし、この考え方は、おそらく、ことばが何らかの意味をその周囲に引き寄せた後のある時点における静的な一面を表すのみで、メルロ＝ポンティがいうところの結果や「過去形」、あるいは、歴史の一断面としての言語の姿ではない(10)。

メルロ＝ポンティがいうところの、paroleのようなことばは、直接的な意味作用ではなく、そのことばが与えられた時点での身体のふるまいと周囲の世界の状況を構造化し、一種のイメージのように照らし出す力をもっている。そして、その構造化のしかた、つまり意識のさせ方は、ことばの性質によってそれぞれ異なる。

われわれ人間が、無意識化・自動化された movement を、ことばの力によって、もう一度意識化できるということは、他の動物がもちえない特権でもある。ゲーレン(Arnold Gehlen, 1904-1976)は、人間の movement が無限の可塑性をもつ理由を、その運動系列が専門化されていないことに求めている。さらにゲーレンは、その可塑性を可能にするものとして運動想像力という能力を提起し、また、ことばが重要な役割を果たしていることを認識していたと推測されるが、今回の事例が示すように、身体との関係が非常に直接的かつ密接なものとはまでは考えていない(11)。今回の実験は、われわれ人間が、ことばを用いて、movementにかかわる身体知をどのように獲得し、伝達し、さらに再創造していくのか、その具体的事例の示唆となったのではないかと思われるのである。

註

(01) movement ということばの使用について

この研究報告においては、「(身体の)動き」「運動」「動作」といった語のいずれをも示すことが可能なことばとして movement を使用する。日本語の「動き」「運動」「動作」ということばは、少しずつ異なる守備範囲をもっている。これらの語のうち、その使用を一つに絞ってしまうことは、しばしば語感に違和感をもたらすため、「動く」「運動する」などの動詞を除いて movement を使うことにした(参照: 滝坂信一「身体にとって表現とは何か—動作の対象かと再構成の機構—」, 国立特殊教育総合研究所『心身障害児の運動障害に課題とその指導に関する研究』(特別研究報告書)2005年、pp.11-25)

(02) 生田は、「わざ言語」という用語は、ハーバード大学の教育哲学者 V.A. ハワードが著書『Artistry』(1982年)の中で用いた「The Languages of Craft」という用語を私が日本語訳したもの」と述べている(日本教師学会第13回大会シンポジウム1記録『「わざ言語」の教育方法としての可能性は何を示唆するのか～新たな「学び」論へ向けて～』, 『教師学研究 増刊: 学びを描き出し、伝える』2013年、pp.45-50;

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jaehd/2013/Special/2013_KJ00009868384/_pdf/-char/ja)

(03) Laban, Rudolf, and Lawrence, F. C. Effort. 1947, London: MacDonald and Evans.

(04) 人間は自らの movementにかかわる動感をはじめとする身体知をたえず獲得し、遂行しているが、大橋は、このような身体知を、対象化、そして概念化・言語化が困難なことから、つまり一種の「原事態」として捉え、こうした身体知に関する記述方法には3つの段階があることを、音楽をモデルとして探り出した(大橋容一郎「身体知の構造—「身体で知る」ことの三段階—」『看護教育』医学書院、2016年12月号、pp.960-968)

(05) M.メルロ＝ポンティ『知覚の現象学2』竹内・木田・宮本訳、みすず書房、1974年、p.296)

(06) M.メルロ＝ポンティ『知覚の現象学1』竹内・小木訳、みすず書房、1967年、pp.301-305。

(07) M.メルロ＝ポンティ『知覚の現象学2』竹内・木田・宮本訳、みすず書房、1974年、pp.296-297。

(08) M.メルロ＝ポンティ「言語の現象学」『メルロ＝ポンティコレクション5 言語の現象学』木田・竹内共訳、みすず書房、2002年、pp.10-11。

(09) もちろん、この変化の可能性は、通時的な国語である langue によってある一定の幅が決められる。

(10) M.メルロ＝ポンティ「言語の現象学」『メルロ＝ポンティコレクション5 言語の現象学』木田・竹内共訳、みすず書房、2002年、pp.4-6。

(11) アーノルト・ゲーレン『人間』平野具男訳、法政大学出版局、1985年、pp.211-220。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 8件)

柿沼 美穂、人間の movement に「ことば」が与える影響について—ダンスの指導実験とその考察—、第 70 回舞踊学会大会一般研究発表（お茶の水女子大学）2018 年 12 月 9 日

柿沼 美穂、身体と言語の関係について—人間の movement と言語に関する実験に基づく考察—、第 69 回美学会全国大会研究発表（関西大学）2018 年 10 月 8 日

柿沼 美穂、人間における言語と movement の関係—運動感覚に関する実験をもとに—、メルロ＝ポンティサークル第 24 回大会一般研究発表（立命館大学）2018 年 9 月 9 日

柿沼 美穂、人間の movement と「ことば」の関係—実験の試みとその考察—、第 69 回舞踊学会大会一般研究発表（日本女子大学）2017 年 12 月 3 日

柿沼 美穂、人体科学会シンポジウム 「舞踊と身体—生きる・動く・踊る—」舞踊の可能性—身体論の視点から—（招待講演）人体科学会第 27 回大会（上智大学）2017 年 10 月 22 日

柿沼 美穂、動感の充実と力の感覚—人間の動きにおける力について—、第 68 回舞踊学会大会一般研究発表（宮崎市民プラザ）2016 年 12 月 4 日

柿沼 美穂、身体と言語—動感の質的記述の試みから見えてくるもの—、第 67 回美学会全国大会研究発表（同志社大学）2016 年 10 月 9 日

柿沼 美穂、動きを言語化する—運動感覚の言語化の試みとその意味—、第 67 回舞踊学会大会一般研究発表（福島大学）2015 年 12 月 5 日

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。